



APS 助教 平野 実晴

- ・ 専門分野：
国際法学、新領域法学
- ・ 科目：
グローバル化と規範
アジア太平洋と人権
専門練習、卒業研究

2021年6月時点

Tips



1. ハンドアウトの作成・事前配布
2. チャレンジングな質問を投げかける
3. 復習に「アイデア・ノート」を活用

Q. 授業のレベルはどのように決定していますか？

A. 100番台の授業である「APS入門」のレクチャーを担当させていただく際は、高校で学んだ知識を「問い」につなげることを意識しています。200番台の科目として「国際法」と「人権論」を担当しており、基本的な事を教えようとしています。学生さんは少し難しいと感じていると思います。というのも、各授業で異なるテーマを扱うので、個別の問題に目が行き過ぎると、自分の学んでいることの全体像が見えず、講義を通して教えているリーガルマインドがなかなか身につかないためです。それでも妥協はせずに、3回生や4回生の時になって、国際法や人権論で学んだ概念や考え方に気づき、戻れるよう、知識の土台となる体系を教えてください。300番台の「グローバル化と規範」はより応用のレベルなの

で、社会問題や理論的な問いを取り上げており、分野の体系というよりもトピックベース、テーマ別で組み立てています。

Q. 学生の学びの質を高めるために、どのような工夫をされていますか？

A. 意識しているのは**インプットとアウトプットのバランス**と**講義の一連の流れ**です。毎回の授業の前に予習の課題として、簡単な選択式のクイズに答えてから授業に出てきてもらっています。授業では事前に配布するハンドアウトを用いて講義や議論を行います。ここまですがインプットです。また、講義につき5回ほど、復習課題を課しており、手を動かして書くというアウトプットを求めています。書くことで、学生たちが授業で何を受け取り、自らの知識にしているかが見えるようになり、教員にも伝わるので、大事にしています。ここまが、14回の

授業でプロセスですが、講義のまとめとして期末レポートを課し、講義の到達目標を達成しているか確認しています。

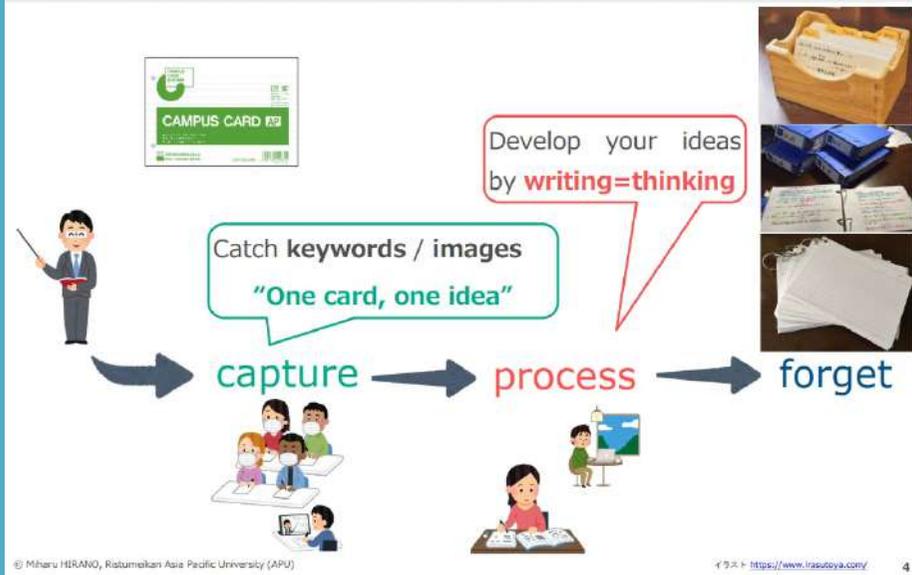
Q. 予習と復習課題を出す時はどのような方法を使っていますか？

A. manabaを活用しています。予習では、授業テーマに関する文章や授業で用いる資料を指定し、目を通していれば回答できる難易度の低い選択式のクイズを課すことで、授業に準備して出席するインセンティブを与えています。学生にとって重くなりすぎないように分量に配慮もしていますが、内容とのバランスはまだ模索しているところです。予習の資料を選ぶ時は学生が読んで分かりやすいことに重点を置きつつ、基礎的で、かつ信頼できるものを選びようとしています。教科書がある場合はいいのですが、今回の Semester の講義は

完璧に内容がマッチしている教科書がないので、試行錯誤しながら選んでいます。

復習では、学生は「**アイデア・ノート**」と私が呼んでいるものを書いてもらっています。これは教員から問題を出すのではなく、学生たちが講義を聞いて受け止めた知識や、気になった疑問について、自由に自分の言葉で記述する短い文章です。授業で学んだことを自分の言葉でまとめたり、考えを発展させたりするよう、指示しています。条件として、①講義内容を踏まえていること、②自分の言葉で書くこと、③アイデア・ノート1つにつき、1つのアイデアに限定すること、④各アイデア・ノートは100ワード以上であること、を定めています。復習では、2ないし3回の授業に対し、2から4のアイデア・ノートを提出してもらっています。学生たちにとって自分で書いてきたアイデア・ノートを見返すと自分がどれだけ学んだのかが分かりやすいのではないかと考えています。

How to use *idea notes* / 情報カードの使い方



る問題です。他にも、時事問題に絡めて話をすることもあります。国際法や人権の内容に入る前に、よく映画を紹介して問題状況のイメージを持ってもらうこともしています。自分が講義で学んだ内容と自分たちが生きている世界との関係が見えてくることでモチベーションを高めてもらえるかと思っています。

工夫2: チャレンジングな問いを投げかけ、オープンな場で議論する

よく、ある社会問題について、白か黒かで判断しようとする学生がいます。あるいは、私の個人的意見を聞かせてほしいという質問をもらいます。しかし、**重要なのは、それぞれの立場がよって立つ論拠を理解し、自分でも論理的に主張を展開できるようになることです。**そこで、講義では、意見の分かれている問題(例: COVID-19の感染拡大に対処するた

め、WHOは十分な役割を果たしているか?)について、学生の考えを聞いたうえで、WHOの権限の範囲や意思決定の仕組みなどを解説し、そのうえで、改めて問いの立て方が正しいのかから、考えてもらっています。

2020年度はFIP予算を活用させていただき、シミュレーションを用いた講義やゼミを行いました。例えば、国際機関での実務経験をお持ちの方の協力を得て、ある国から逃げて難民申請をしている人の模擬事例を作成しました。学生には、基準に則って、この人が難民であるかどうかを検討し、判断の理由を説明してもらい、それに対しフィードバックを行いました。チャレンジングな問いを投げかけると、はじめは自分の信念で答えを返してくれますが、ある立場が法的にどう正当化されるか教室全体を巻き込んで議論することで、明らかに学生さんたちの頭の中が動いているの

アイデア・ノートの活用を始めたのは、先生のためにレポートを書いている学生が多く、**自分自身のために知識を貯めてほしい**と思うようになったことがきっかけです。知識のコピー&ペーストをしている学生の存在が問題視されていますが、そもそも自分の考えを創りあげるテクニックを身につけられていないところに原因があるのではないかと感じています。**大学は、知識を創る一歩を踏み出そうとするところ**だと思います。とはいえ、これはとても難しいことです。A4一枚の小レポートであっても、様々なアイデアを組み合わせることが書く必要があります。こうした成果いきなり求めるのではなく、まずは一つひとつのアイデアを育てるところに重点を置いてみてはどうかと考えました。知識を自分の頭に記憶するよりも、自分の言葉として記録することでこそ、後の発表やレポート、さらには卒論など、執筆の場面で活用することができます。

が見えてきます。それが学びに繋がるのではないかとと思っています。

Q. オンラインとハイブリッドの授業を行う上で工夫されたことはありますか?

工夫1: ハンドアウトの事前配布

基本的に学生が持っていて欲しい情報を記載したハンドアウトを作って、学生たちに事前に渡すことです。一つの講義当たりA4用紙で2枚から4枚ぐらいで、授業のポイントの箇条書きや図、取り上げる条文やケースなどを資料として掲載し、manabaにアップロードしています。学生は、授業では聞くことか読むことのどちらかにしか集中ができず、先生の話聞きながら同時にスライドを見ても学生は分からな

今回学生に提案しているのは、生協でも販売していただいているB6サイズの情報カード(京大式とも呼ばれています)に、手で書く方法です。デジタル・ツールを否定する意図はありませんが、手で書く楽しさも味わってみたいですね。

Q. 学生の学びのモチベーションを高めるために工夫されていることはありますか?

工夫1: 知識と自分たちの生活を繋げる

学生には、知る人ぞ知るといふ知識ではなく、社会基盤となっている国際法の基本的な知識を伝えています。「グローバル化と規範」の授業では、貿易に関する国際法規則について話しましたが、それは生活にも関わ

いていると思います。そこで、ハンドアウトを渡すことで、事前に資料に目を通しておくことができます。また、授業のアウトラインが見えやすいので、授業の進捗や重要なポイントも追いやすくなります。授業ではスライドも使いますが、図や写真、キーワードを見せる補助的なものとして使っています。

工夫2: TAとの連携

TAさんに質問の受付を手伝ってもらっています。受講生が150人を超える講義ですので、あまりインタラクティブにはできません。そこで、学生からの質問をTAさんにチャットで送ってもらっています。TAはハンドアウトのアウトラインに従って質問をまとめ、私の前の画面でも同時に表示している共有ドキュメントに貼り付けてくれます。それを見て、質問に適宜答えながら講義をしています。

工夫3：学生の受講環境への配慮

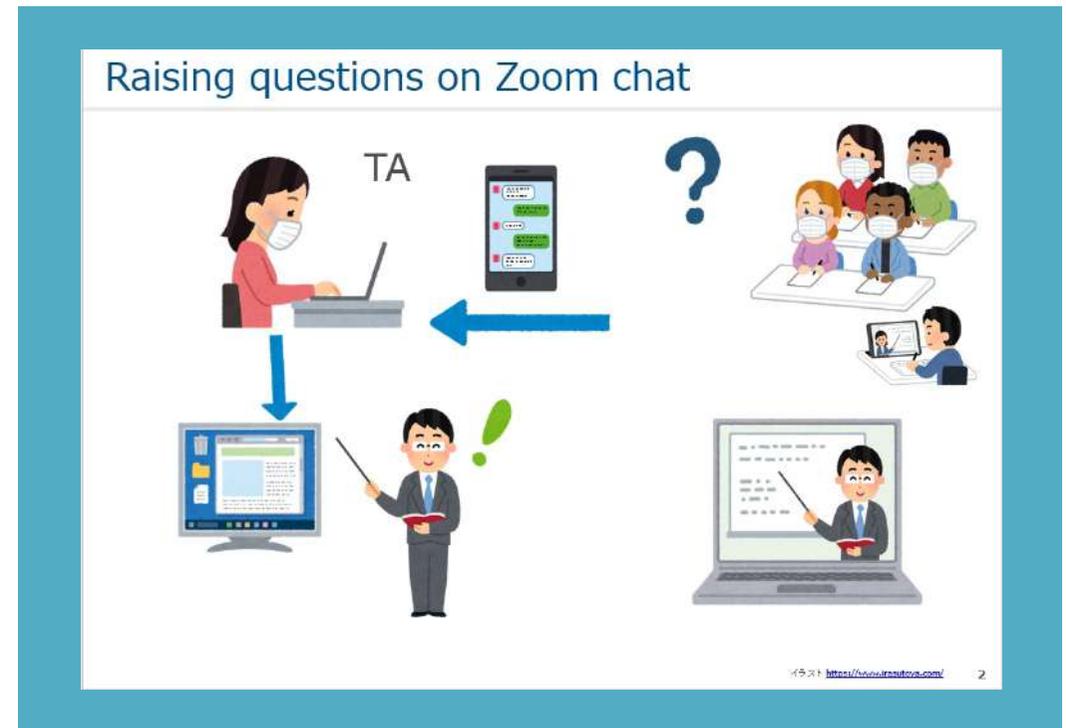
録画で受講している学生もいるので、例えば、予習課題の締め切りの時間がフェアになるように注意しています。また、オンライン授業は疲れるので、講義の真ん中ぐらいに軽く休みを入れて音楽をかけたり、授業に関連する映画の紹介をしたりしています。

Q. 授業内容を改善する時に、どのようなステップで改善を行われていますか？

A. 一つ目は、毎回の授業の最後にレスポンドでコメントや質問をもらう方法です。講義後に確認し、授業スタイルを微修正したり、次の授業でいくつかの質問に答えています。二つ目は、期末レポートを受け取った時、

どの程度のレポートを学生さんが書いている、書けていない、ということを見えています。これは、授業の予習や復習で活用するテクニックのヒントにもなり、先ほどお話したアイデア・ノートもそこから生まれたものと言えるかもしれません。

三つ目は、学生さんが授業の最後に書いてくれる授業評価アンケートを受け取った時にどの項目の点数が他より悪いか確認し、学生さんのコメントを見つつ、次の講義の設計に活かしています。



Q. 先生が教育をおこなう中で大切にしていることは何ですか？

A. 今のパンデミックの中では、優先順位を大事にしています。つまり、**学生たちは健康であることやストレスに押しつぶされないということがまずあって、その上で勉強できるのだ**と思っています。そのため、例えば、復習課題を遅れて提出することを、事前に理由を端的に説明した場合には柔軟に認めています。興味深いことに、期限を守る学生が逆に増えた印象を持っています。

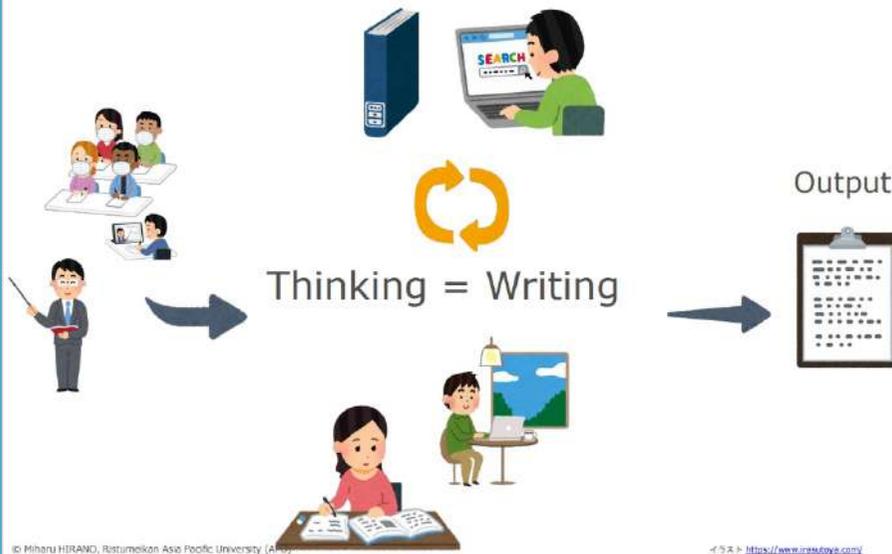
教える中身については、**先生が関心あることを教えるよりも、学生さんが知っておいた方がいいことを基準として教える**ように心がけています。

Q. 授業を受ける学生に期待することは何かありますか？

A. 学生に期待していることは、**受け身にならないで、ちょっと前のめりになって欲しいですね**。期末レポートやアイデア・ノートは、自分のために書くものなので、より貪欲に講義を聞いて書いてほしいと思っていて、先生がこれを書けと言っているから書くという受け身にならないで欲しいです。先生は学生たちが知っておいてほしいことを教えているので、できるだけそれが何で自分にとって重要になるのかを考えながら積極的に授業に参加することを期待しています。

実験的に取り組んでいるアイデア・ノートは、授業で学んだことを自分のものにするためのツールです。何を書くかは学生の自由度が大きいとはいえ、考えていることの原因が示され

Learning strategies & grading



なければ相手には届きません。「自分はこう考えている」というだけでは世界は良くなりません。「それはなぜか」を説明する能力を身に着けるためにも、このツールを役立てて欲しいと思います。

インタビューの感想

今回のインタビューを通じて、先生が一方向的に知識と情報を伝える授業ではなく、学生たちが自ら考え、学んだ内容を整理できるように、毎回授業の前後に多くの準備と工夫をしてくださっている先生のご苦勞を知ることができました。先生ならではの斬新な授業スタイル、授業ビジョンを知ることができてとても興味深かったです。個人的に授業を受けるインプットと知識を自分なりに整理したり、日常生活に繋げて考え見たりするアウトプットの大切さに気づくことができました。今後はノートテキングで終わらずに、授業の内容を元にアイデア・ノートのように、自分の言葉で考え、整理することで、その知識が自分のものになるように復習していきたいです。この過程を通じて、自分の学びの質を高めることができると考えています。



「Q」とは

APUで素晴らしい授業を行っている先生方はたくさんいらっしゃいますが、先生方が授業中にどのような工夫をしているのか知ることが出来れば、他の先生の授業改善にも役立つ。そのために、インタビューをして授業の工夫を教えてください、ということで始めた取り組みです。この記事は、授業の「Quality=質」を高める、質を高めるための「Question=問」に答える、授業改善の「Queue=列」をなす、など、色々な意味を込めて「Q」と名付けました。先生方の授業の質向上の「Quest」に役立てられると幸いです。

